

花火の盆がえり

清水希容子

財団法人日本経済研究所 地域未来研究センター 上席主任研究員

今年の夏多くの若者たちが、気ぜわしい都会の生活をひととき離れ、花火大会の華やぎを求めて家族、恋人、友人たちの待つるさとへ帰ってきました。

現在ある全国の花火大会は、大規模なものだけでも182（地図参照）、季節はほとんどが7月、8月です。俳句の季語にも登場し、多くの句に詠まれています。

花火は、戦国時代に海外から火薬製造が伝わったことが起源です。泰平の世にうつり、徳川家康が武器につながる火薬の取り扱いを三河に限定、ここから日本の花火文化が始まりました。

江戸時代になると、三河の花火師は線香花火やねずみ花火などの“おもちゃ花火”をつくり、江戸の街中で商いを始めます。また、隅田川沿いにあった大名屋敷で、殿様が来訪した際の余興としてスルルルと音をたてる狼煙のようなものを上げるようになります。それが町民たちの間で話題となり、札差や大欄といわれる町方のお金持ちがスポンサーとなって、華やかでいさぎよい花火を景気よく打上げるようになりました。“打上花火”的有り様は、江戸っ子の持つ覇氣や心意気にぴたりと合い、たちまち人気となります。

八代將軍徳川吉宗は、大流行した疫病の慰靈に隅田川沿いで花火を打ち上げました。これが現在の「隅田川花火大会」の原形です。その後、悪疫退散、五穀豊穣、無病息災、天下泰平を祈願する花火大会が全国で開催されるようになりました。空からみると球体をしている花火は、東西南北、遠近どこから見ても同じ形に見え、だれにも公平を感じさせます。

〈暗く暑く大群衆と花火待つ 西東三鬼〉

今日の花火大会は、分かるものだけでも平均開催回数46回を数え、地域の生活歳時記として定着して

います。花火は不特定多数の住民に元気を与え、近年は、にぎわいを創出し地元の公共交通、飲食物販などで経済効果が期待されること、地域の宣伝になることなどから積極的に取組む自治体が多くなりました。企業も有料桟敷席を購入するなどして参加しています。

〈温泉の村に弘法様の花火かな 夏目漱石〉

地域別には東高西低です。戦国・江戸時代から盛んだった三河～伊豆（静岡県14大会、愛知県11）や江戸方面（東京都13、神奈川県12）の他、新潟県（14）を筆頭に関東甲信越や東北地方で多く開催されています。

花火と職人のまち・新潟県小千谷市片貝の花火は、地元神社の奉納花火として400年もの伝統があり、世界で唯一四尺玉を打ち上げることでも有名です。ほとんどが個人スポンサーで、誕生、成人、厄年、還暦など人生の節目を祝った花火が打ち上げられ、その際は同級生の約8割が地元に戻ってくるといわれます。「花火は人々の日常生活に根付いているものです。」と片貝煙火工業の本田正憲社長は語ってくれました。

四季の変化とリズムのなかで日々真面目に働く生活があるからこそ、年に一度の花火は華やかで人々の気持ちを高揚させ、その音は人間の心の奥底にまで響きわたり魅了するのでしょうか。

最後の一発が終わったときの何とも言えない静寂は、昔から若者たちが故郷にもどり、我を見つめ返し元気をとりもどす一瞬なのかもしれません。花火大会とは、これから的人生において、何度も繰り返される“回帰の源泉”。だから、来年の夏もまた帰ってくるにちがいありません。

〈ねむりても旅の花火の胸にひらく 大野林火〉

平成21年度の主な花火大会



(社)日本煙火協会資料より(財)日本経済研究所にて作成。

隅田川花火大会
(提供:墨田区観光協会)



片貝の四尺玉
(新潟県小千谷市)

